

手をたずさえて

“KOHARADA WAY” 自分に打ちかて

- 心身ともに健康で明朗な生徒
- 自主的に学習する生徒
- 責任を重んじ協調性のある生徒



令和2年7月22日(水)発行
【発行責任者】郡山市立小原田中学校長 熊坂 洋

“心がこもった言葉には、人を動かす力がある”

～1年国語科「空を見上げて」の授業から～

1年国語科では、「空を見上げて」という教材を学習しました。

宇宙システムエンジニアの山中勉氏が、東日本大震災の発生後、宮城県女川町などの学校で出前授業を行い、生徒達が作った五・七・五の言葉などの作品を国際宇宙ステーションに届ける活動が続けていました。それを教材化したのが、この「空を見上げて」です。

女川の中学生の作った五・七・五の言葉には、日本はもちろん世界中の人達から連句のように七・七の句が届けられ、言葉の輪が広がっていきました。そして、この女川の中学生と世界中の人達が紡いだ言葉は、国際宇宙ステーション「きぼう」に届けられたというドラマチックな話です。

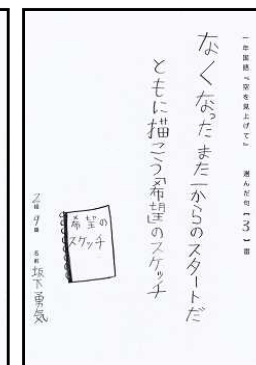
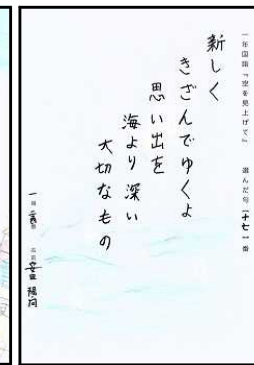
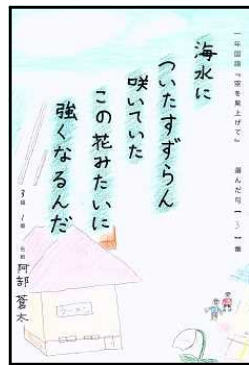
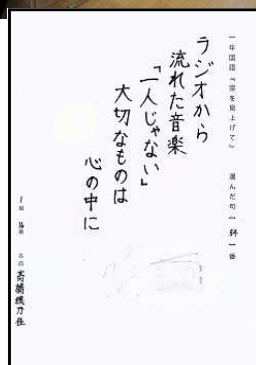
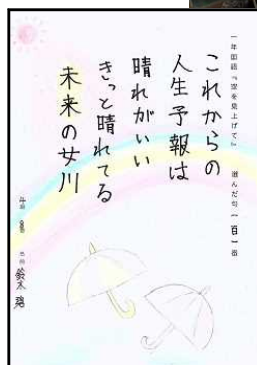
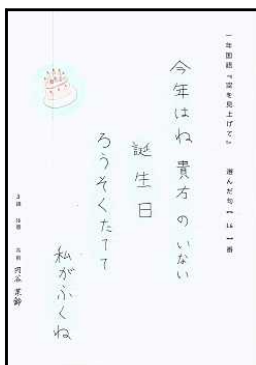
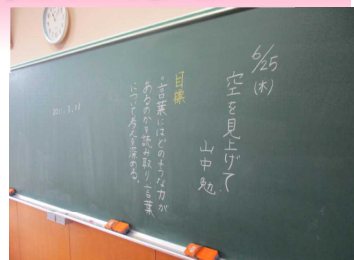
例えば、こんな作品があります。

「みあげれば がれきの上に こいのぼり」(女川)

「未来への川 登り続ける」(東京)

教科書の本文には「心がこもった言葉には、人を動かす力がある」と書かれています。1年生達は、東日本大震災時は3歳でした。記憶にあるという生徒もいました。今、コロナ渦の中にいる状況と、あの東日本大震災の時の経験やあの時の想いとが重なってくるような気がします。

この教材での学習では、生徒達は自分の心に残った女川の中学生の作品(五・七・五)を選び、それに自分の言葉で七・七の句をつなげるという活動を行いました。相手への思いやりや気遣い、支え合い、希望や勇気、前向きな気持ち、そしてエールなど、今の自分たちがおかれている状況にそれらの想いを投影している作品が数多く見られました。いくつかの作品を紹介します。





「心のこもった言葉には、人を動かす力がある」

1年生の作品を見て、まさにそのとおりだなと実感することができました。作品に込めた想いを大切にするとともに、自分のこれからの生活のどこかの場面で具体的に動けるといいですね。そこに今回の学習の意味があると考えます。さらに、先の7月豪雨でも多くの人達が悲しくつらい想いをした中でも、今懸命に復旧に立ち向かう姿があります。決して他人事ではないという気持ちを持ち続けたいと思います。



9年4ヶ月前こんな経験をしました！郡山市の隣の学校での出来事

私が校長になって初めての卒業式の日があの日東日本大震災の「3.11」でした。その学校は、本宮市立本宮第二中学校でした。郡山市の北隣に位置します。地震発生時、校庭に避難した我々の目の前で、校舎の1階部分がつぶれ、校舎が傾きました。映画の1シーンを観ているかのようなでした。卒業式の際、保護者控室となっていた2つの理科室の損壊が最もひどく、体育館も壁が崩れ落ち、多くの窓ガラスが破損し散乱しました。もしあの地震が数時間ずれていたら大惨事になっていたと思います。



地震で傾いた南校舎
悲鳴を上げているようでした

その後、校舎、体育館は使用できなくなりました。学区内の公民館での間借り生活やプレハブ校舎での厳しく困難な生活が長く続きました。でも当時の生徒や教職員は本当によく頑張ってくれました。校長3年目には、県内で被災した学校の中では一番早く新築体育館が完成し、その真新しい体育館で卒業式を行うことができました。

この本宮二中での経験から強く感じたことは、人は「生きる」と同時に、他から「生かされている」ということでした。様々な方々からいただいた数多くの支援や励ましは、本当にありがたかったです。また、すばらしい“出逢い”もたくさんありました。



損壊の一番激しかった1階理科室の内部と外部

東日本大震災から9年4ヶ月が経過し、今はコロナ渦の中にいる我々。人と人のつながりや支え合うことの大切さを1年国語の授業から再認識することができました。